



42

「渋」

街で、サンタクロースの格好を「させられている」人を見かけた。

おそらく大学生で、普段の彼のことは知らないけれど、きっといつも通りに品出しの作業を淡々とこなしている。下を向いたり立ち上がったり、動きにくそうだ。加えて、表情がちょっと浮かない様子に見え、その姿はさながら“渋々サンタ”といったところ。結構似合っていた。

それを見て、ふと昔のクリスマスを思い出した。

いつかの12月25日、クリスマス用のカチューシャをつけて接客をしたことがある。サンタの帽子とトナカイの角が一緒になった、少し欲張りなデザインだった。頭にちゃんと乗せるだけで、強制的にパーテイー仕様になる。

ただ、飲食店のクリスマスは、そんな楽しいものではなく、とにかく忙しい。

オーダーは止まらず溜まっていくばかりなのに、団体のお客さんのファーストドリンクがまだ出ていない、などと悲痛な声が飛んでくる。表に出たり、裏に回ったり、気づけばずつと動き回っていた。

「似合ってますね」と声をかけてくれるお客様もいたけれど、そのときに返した笑顔は、きっとだいぶぎこちなかつたと思う。

嵐のような時間が過ぎて、ようやく営業が終わった。

その瞬間、クリスマス用のメニューは、少し残酷だけれど商品としては完全に「用済み」になる。

でも大丈夫。ここには腹を空かせた渋々サンタがいる。

営業中は「クリスマスに一度と働くもんか」なんて思つたりもしたけれど、がらんとした店内で、ちょっとした充実感とともにケーキを頬張ったあの時間は、今となつては悪くない思い出になつている。

スーパーの入り口で「特売品をどうぞ」と手招きするサンタクロースがいる。

中古品店の一角に登場させられ、「お売りください」と笑いかける姿も。

たとえ当初の存在から変容し、どれだけ商業ベースになつていつてしまつたとしても、そこには喜ぶ人がいてほしい。

ほら、店先のサンタクロースに、小さな子どもが反応している。

うまくいかない日々のことや、世の中のいろいろな出来事、あらそいことは、きっと簡単に消えたりはしない。

それでも、「それはさておき」と、ぜんぶをいつたん脇に置いておく瞬間が必要だと感じる。

クリスマスは、誰にとつてもそんな日であつてほしい。